

「09年豚インフル」という教訓

ローリー・ギャレット
(米外交評議会シニアフェロー(当時))

新型インフル 数週間でメキシコから欧州、日本へ拡大した09年の豚インフルエンザ。新型コロナとも重なる特徴と教訓を当時の記事から読み解く

2 005年11月の末。感謝祭の休日を控えた米ウイスコンシン州のある食肉

処理場で、17歳の少年が31頭のブタの解体作業を手伝っていた。その1週間後にも、少年は別のブタの解体を手伝った。

一方、少年の家では感謝祭に備えて1羽のニワトリを購入、五大湖に接するウイスコンシン州の厳しい寒さから守るため、室内に入れておいた。

そして12月7日、少年はインフルエンザを発症。3日後に地元のクリニックで診療を受け、その後すっかり回復した。家族で発症した者はいなかった。

こうした経過自体は、必ずしも珍しくない。しかし少年を襲ったウイルスは、今までに知られている種類とは全く異なっていた。鳥とヒト、そしてブタのウイルスが交じり合っていたのだ。

新型インフルエンザ——H1N1

1型豚インフルエンザの誕生である。当時はほとんど誰も騒がなかったが、このウイルスは人知れず進化を続け、3年半後の世界を大混乱に陥れることになる。

09年4月、メキシコ東部のベラクルス州ラグロリア在住の5歳児エドガー・エンリケ・エルナンデスがインフルエンザを発症。調べてみると、05年の症例と同じ鳥・ヒト・ブタの混合型H1N1ウイルスだった。こうして世界規模のインフルエンザ危機が始まった。危機が起きると、誰かに責任を

なすり付けたくなるのは人間のさ。当時もブタやメキシコが悪者扱いされていた。だが、そんな非難は科学的根拠を欠く。

私たちの住むグローバル化された世界は微生物による脅威に満ちている。地球のどこかで生まれた細菌やウイルスが、あつという間に国境や海を越えて広がり、増殖と変異を繰り返してどんどん強力になっていく。全ては人類がさまざまな活動を通じて、生態系を猛スピードで変えているせいだ。ブタは、その辺にあるものを何でも口に入れてしまう。しかも、

互いの体を頻繁にこすり合わせる習性がある。だから感染が広がりやすい。また、ブタの胃の中が細菌類の繁殖に適した環境だということも知られている(そのため昔から、豚肉はよく火を通してから食べると言われてきた)。

1918〜19年に世界中で推定2000万〜5000万人の犠牲者を出したスペイン風邪については、その後の調査でH1N1型のインフルエンザが最初はヒトからブタに感染し、次いでブタからヒトに戻って感染が広がったことが分かっている。

変異するウイルスの恐怖

インフルエンザのウイルスは、とにかく変異を起こしやすい。高等生物と違って、遺伝物質はDNAではなくRNAの形を取り、染色体の中に集まっている。ひとたびウイルスが細胞に侵入すると、



(ブルガリア、09年)

その染色体が暴れだし、猛烈に増殖（複製）し始める。こうして増えたウイルスは、さらに血流に入り込んで体内を巡り、増えていく。この増殖の過程で、ウイルスは細胞内にある遺伝物質なら何でもコピーして取り込んでいく。人体に入り込んだウイルスはヒトの遺伝物質を、鳥類に入り込めばトリ遺伝子を、ブタに入り込めばブタ遺伝子を取り込む。

インフルエンザの進化は、タイプの異なるウイルスが同時に誰かの細胞に侵入し、互いの染色体をコピーし合って新種のウイルスに変身することで起きる。ウィスコンシン州の少年を襲ったのは、ヒトとブタと鳥類から遺伝子を集めてきた3種混合ウイルスだった。

テキサス州保健局は08年8月、病気のブタと接触してインフルエンザを発症した例を疾病対策センター（CDC）に報告した。感染者は数日後には回復し、2次感染者も起きなかった。だがCDCが感染者の血液サンプルを調べた結果、「H1N1型3種再集合体ウイルス」が検出された。05年にウィスコンシン州の少年が感染したのと同じ型である。

そして09年3月、ついにアウト



ブタに罪なし 人類は畜産の在り方を真剣に検討する必要があるだろう

ブレイク（感染症の爆発的拡大）となる。3月半ば、メキシコの複数の州でインフルエンザウイルス感染者数が急増した。ほぼ同じ頃、カリフォルニア州南部の保健当局はサンディエゴ郡に住む10歳の少年と、インペリアル郡に住む9歳の少女がかかったインフルエンザに目を留めていた。2人とも無事回復したが、家族に感染。CDCが4月初めに発症した子供2人の血液サンプルを調べたところ、H1N1型ウイルスが検出された。同じ頃メキシコでは、50人以上のインフルエンザ患者の重症化が報告された。そこで、この分野で評価を得ていたカナダの国立微生物

学研究所が血液サンプルを検査。メキシコの「謎のウイルス」もH1N1型であることが判明した。

工場式の畜産が温床に

幸いにもメキシコは、政府がまともに機能していれば、パンデミックの危機に適切な対応が取れることを世界に示した。感染拡大を防ぐため、政府は学校や娯楽施設など人が集まる場所を閉鎖した。メキシコ経済はこの措置で大きな痛手を受けたが、素早い判断で多くの人命が救われ、感染の拡大にブレーキをかけることができた。より根本的な対策として、今の畜産の在り方を見直すことも必要

だろう。大規模で密集した農業生産が地球の生態系を脅かしている。狭い区画に何万羽、何万頭もの家畜がひしめく養鶏・養豚場の光景は異様だ。繁殖用の家畜が世界各地に空輸されれば、ウイルスも一緒に空を飛んでいく。そして真っ先に犠牲になるのは、感染した家畜と接触する機会が多い低賃金の出稼ぎ労働者だ。

インドや中国の人々の暮らしが豊かになるにつれ、こうした事態は悪化する傾向にある。80年には中国の1人当たりの年間の食肉消費量は約20キロだったが、現在では約50キロ。83年の世界の食肉消費量は1億5200万キロだったが、97年には2億3300万キロとなり、国連食糧農業機関（FAO）の推定では、2020年までに牛、豚、鶏の肉と養殖魚を合わせた消費量は3億8600万キロを超える見込みだという。

今の工場式畜産は、豚と鳥のインフルエンザが発生し、ウイルスが変異を遂げるのに好都合の状況を生み出している。この状況にメスを入れなければ、スペイン風邪の流行をはるかに上回る史上最悪のパンデミックがいつ起きてもおかしくない。